

近世から近代における広島カキ船営業の地域的展開

片上 広子

- I. はじめに
- II. 広島におけるカキ養殖業地域の諸相
- III. 大阪におけるカキ船の立地要因
- IV. 大阪におけるカキ船の展開
- V. カキ船の機能変化に伴う立地変容
- VI. おわりに

I. はじめに

広島カキの名を広め販路を拡張し、その消費拡大に貢献したのはカキ船である。カキ船は川岸につないだ和船に座敷を設け、客にカキ料理を提供する一種の水上料理店である。

カキ養殖者が広島からカキを輸送してきた船を、販売にも使って船料理の情緒をかもし、という独特の販売方法を考え出したのである。今日でいうところの「産地直販」¹⁾の先駆と言えよう。

その起源は元禄年間(1688~1703)にさかのぼる²⁾。広島草津村(現、広島市西区)のカキ養殖者が、殻付きカキを俵に詰めカキ船に積み込み、天下の台所・大阪へ直航し、船を橋につないで客の前でカキ打ちの実演をして生カキを売ったのが始まりと言われる³⁾。

明治末から大正にかけての最盛期には、50~60隻ものカキ船が広島から大阪に商売に来ていた(図1)。広島のカキ船が大阪名物の一つに数えられていたほどであった。

広島カキは、恵まれた自然環境や多くの先人の努

力によって450年余の歴史⁴⁾を誇り、今日では全国の生産量の約7割を占めるまでに発展した⁵⁾。

広島カキについては、これまでに多くの研究が蓄積されている。なかでも新見吉治(1907)は草津村のカキ仲間の組織や取締法について⁶⁾、羽原又吉(1954)は江戸時代における広島湾養殖業の発展過程について⁷⁾、草津村の小川家文書⁸⁾などを手がかりに、いずれも漁業経済史の見地から論じた。

大島襄二(1972)は水産養殖業という研究対象を、文化人類学や生物地理学や経済地理学の立場など広い視野から考察した。前述の漁業経済史の学者らは発生の事情に重点を置いたが、大島はその養殖事業が現在へどのように引き継がれているかに重点を置き、将来の養殖をも見据えている⁹⁾。

その後、川上雅之(1976a, 1976b)が広島太田川デルタ漁業史の中で、広島カキ養殖法の発達について論じた後、これに関連する事項としてカキ養殖業者が考え出したカキ船をとりあげ、その起こりから消滅に至った過程を古文書や川上自身の聞き取り調査に基づいて述べている¹⁰⁾。

土井作治(1978)は、運上銀を藩に納めることを条件に、広島牡蠣仲間に大阪への輸送・販売の独占権を与えたのは、広島藩の藩政改革によるものであったことを明らかにし、広島牡蠣株仲間と大阪市場の関係を論じた¹¹⁾。

このように広島カキに関するわが国の諸研究においては、養殖に最適な自然条件、養殖の歴史や養殖方法、その社会経済的背景の把握など、主として生

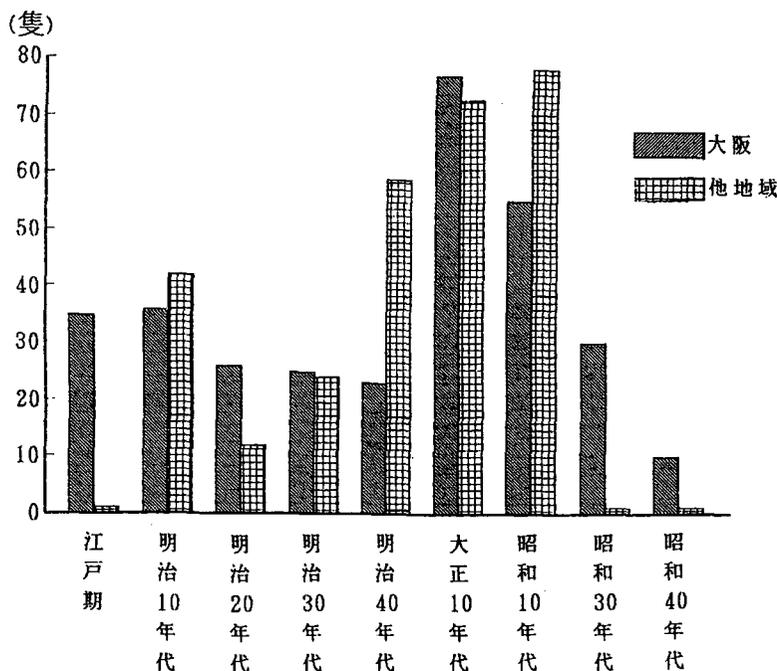


図1 大阪およびその他の地域における広島カキ船数の変遷

広島カキ出荷振興協議会(1977)『広島カキ』および三浦行雄(1993)『牡蠣舟』(『大阪春秋』)により作成

産面に主眼が置かれてきたように思われる。

一方、養殖事業が軌道に乗り、生産性も向上したカキの消費と流通については、看過されてきたと言えるのではないだろうか。とりわけ、広島カキの普及、消費拡大を推進してきたカキ船の歴史地理学的見地からの研究例は極めて少ないのである。新見・羽原・川上・土井のいずれもが、カキ船の大阪堀川における営業地点を列挙したにすぎない。

その理由として、史・資料の制約もその一つとしてあげられる。運送手段の変化に対応しながらカキ船による殻付きカキ出荷が次第に衰退し、汽船や汽船によるむき身カキ出荷にとって代わられたからである。また戦後、大阪の大部分の堀川が埋め立てられ、料理業を営むカキ船は立ち退きを余儀なくされ、ほとんど姿を消してしまったからでもある。

そこで小稿では、近世から近代におけるカキ船の販売活動を復元し、消費・流通面から広島カキを地域的に捉えることを試みたい。近世において全国最

大の流通・消費都市であった大阪市場で販売することによって、広島における生産の基盤も確立された、と筆者は考えるからである。

研究方法として、近世に関する文献については、広島県の『芸藩通志』¹²⁾や、各村から提出された下調べ帳¹³⁾など既存の文献や絵図を手がかりに、また近代以降では『広島県史』¹⁴⁾『新修広島市史』¹⁵⁾、各町村郡史^{16),17)}、『大阪府史』¹⁸⁾、『大阪市史』¹⁹⁾などからカキ船に関する項目を取りあげた。筆者は、草津・江波・仁保・丹那・坂地区などにおける現地調査や、広島市水産振興協会で養殖技術について聞き取り調査を行った。さらに大阪・淀屋橋南東詰「かき広」や広島・元安川平和大橋東詰「かなわ」など、現在わずかに残るカキ船の変容を確認しようと試みた。

大正末から終戦までの20年間、瀬戸内航路を毎年1回航海し、和歌山市京橋のたもとでカキ船を営業していた矢野町(広島市安芸区)在住の古老より聞き取り調査を行った。

これらの資料を基にして、カキ船の販売場所の分布を地図上にプロットする。この作業を通して、カキ船の立地要因、大阪市場における地域的差異、およびカキ船のもつ機能変化より見た立地の変容を明らかにする。

II. 広島におけるカキ養殖業地域の諸相

カキ船営業者らはカキを広島から大阪までどのようにして輸送し、輸送にどのくらいの日数を要したのだろうか。

文献²⁰⁾には、殻付きカキを俵に詰め潮水を含ませてからカキ船に積み込んだと記されている。船は300石積みの木造船で、帆柱3本を建て、6反帆を揚げ、2丁櫓つきの帆走型であった。冬の西風と潮流を利用し、地乗り²¹⁾で広島から大阪まで3日の行程であった。

聞き取り調査でもほぼ同様の話が得られた。和歌山までは早くて4、5日、昭和期には曳船でカキ船を曳航した。1隻の曳船で2隻のカキ船を曳航し、曳航綱がからみついてあわや大事故ということもあったという。航路は、初日は尾道(糸崎)に泊まり、2日目は鞆浦²²⁾付近、3日目は明石港手前(赤穂港・飾磨港・高砂港)で、ここからが音戸の瀬戸とならぶ難所の播磨灘であり、4日目は明石港より洲本港、和歌山港着となる。カキは、矢野や海田や大野のものをむき身にして、ピク、1斗かごに入れて汽車で送っていた。

さらに、冷蔵設備のないカキ船の中でも鮮度を保ち、俵詰めによる長時間・遠距離輸送に耐えうるカキとは、どのようにして養殖され、今のカキと違いがあるのだろうか。

カキ養殖は一般的に、採苗(種をとる)→育成(活かしておく)→身入り(大きくふとらせる)の段階をとる。カキ船が出始めた近世における養殖は、ひび立て法²³⁾によるものである。ひび竹²⁴⁾を干潟(「ひび場」と呼ぶ)に立て、カキ種を採苗し、育成させる方法で、途中でカキをひびから打ち落とし、干潟

(「活場」とか「カキ田」と呼ぶ)にまいて育成する。江戸初期から昭和初期まで約300年間もこの方法が行われた²⁵⁾。

この養殖法のカキは、満潮のときは海中に沈み、干潮のときは水面に出るくらいの深さで、1日の半分は空気にさらされていた。これを自然抑制といい、潮の干満を利用して、カキを一定時間空気中にさらし成長を抑制すると、カキに抵抗力がつき、小粒で良質のものになる。カキは寒くないように殻をしっかり閉じ、これにエネルギーを使っているから大きくならない。成長は遅いが今のものより長持ちし半月くらいだったという²⁶⁾。

ひび竹で養殖したカキは二年カキで、殻が薄く身入りも充分なものではなかった。カキ船の俵詰め輸送に耐えるようにするには、殻の丈夫な大型カキに仕上げる必要があった。

仁保島²⁷⁾では、太田川支流の猿猴川河口部沖合で滞筋に当たり、潮通しのよい、やや深い岩盤体の海底がある。これを身入り場に開発し、小型カキを移してふとらせた(図2)。ここでじっくりとカキの育成を待ち、三～四年の立派な大型カキに仕上げる方法を完成させた。

『仁保村志』は次のように記している。「仁保の特色は三年カキである。全国でカキを養殖する所多しと雖ども本村の如き三年カキは其の例なし。大概養ふこと三年にしてこれ出し国内及び大阪諸方に売ること甚だ広し、凡そカキを出すの地多しと雖も此の地のもの最も名品とし洛摂(京阪)の人は是を珍とするは其の土地の宜しきのみならず、又畜養法を得る故なるべし²⁸⁾。」大阪でもこの美味をたたえる記録がある²⁹⁾。

仁保島に三年カキの養殖を可能にした地理的条件は以下のように考えられている。

太田川支流の猿猴川と府中川が合流して南北に長い入れ江を形成し、まさに天然の生簀と呼べるほどであった。その内潟に位置する洲崎・本浦・向洋では、この川からカキの餌となる植物プランクトンを

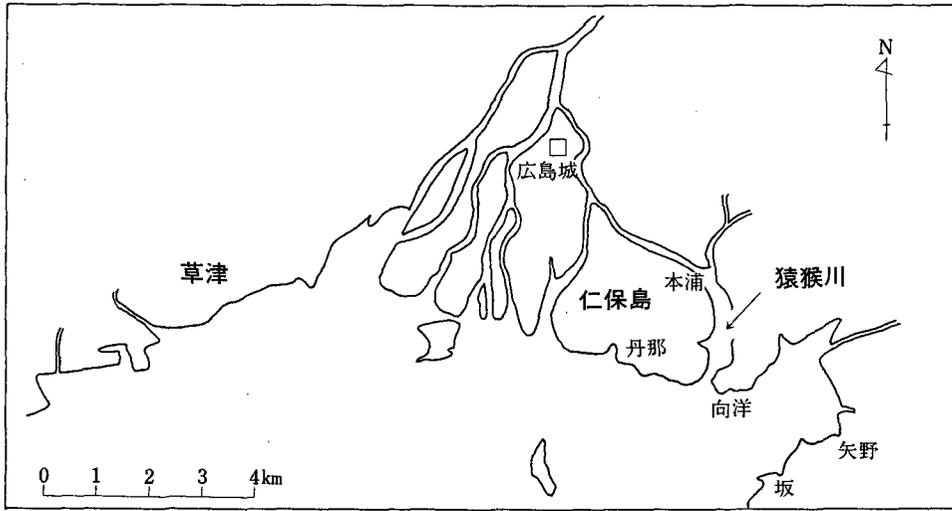


図2 江戸期の広島湾概観図
広島市 (1955)『概観広島市史』により作成

育てる栄養のある水が流れ込むので、ひび立てによる養殖が行われた。カキ船用殻付きカキとしては猿猴川尻のものが遠距離輸送に耐え、身入りも優秀であることが知られていた³⁰⁾。

しかし、猿猴川に沿う仁保島内潟の海面は狭隘であるうえに、ノリと一緒に養殖されていたため、その発展には限界があった。

一方、草津沖は、前が開け風や波の影響を受けやすい地形であった。そこで、ひび竹を短くしたり、風波に耐える丈夫な男竹のひびを使うなど工夫をして採苗を行っていた。ところが草津村では、この大量の一年カキをさらに育成するために必要な広くて安全な身入り場がなかった³¹⁾。また大きな河川水の流入がないので、カキの餌になる植物プランクトンを増殖させる栄養塩(窒素・リンその他)を陸上から補給できず、同時に塩分濃度の低下をもたらさない³²⁾。そのため草津村では、ひび場の前に川砂を舟で運び、毎年客土を繰り返して活場を開発した。しかし風や波が潮の影響を受けやすい地形のため、ひとたび台風が来れば身入り場はもちろん、ひび場・活場のカキまで流されてしまう被害にみまわれた。

そこで草津村では、仁保島の藻崎の干潟に活場や

身入り場を買い求めて、カキ仲間共同で畜養をした。また草津村だけのカキで不足する時には、仁保島カキを仲間共同で買い入れては、カキ船の営業をしていた。仕入先は仁保島と定められていた。さらに宮島の室濱や、宮島瀬戸の中央にある鞍掛の瀬の広大な岩盤体に身入り場を確保するなど、その努力は相当なものであった。

草津村においては身入り場の安定がないために、仁保島からのカキ船が加わることを認めざるを得なかったと推測できる。

III. 大阪におけるカキ船の立地要因

カキ船による最大の販売先は大阪であると一般に言われている。

広島カキが大阪に販路を開いたのは延宝年間(1673~80)であったといわれるが、当時はまだわずかに販売の糸口がつけられたにすぎなかった³³⁾。

広島草津村でカキ養殖を行っていた小西屋五郎八ら5名のカキ師(カキ養殖業者をこのように呼ぶ)たちがカキを船で内海沿岸の諸港へ売り歩いた、と記録されている³⁴⁾。彼らは組合組織をつくり、生産から販売まで一貫した運営の必要性を、草津村役人河

面（松屋）仁右衛門に要望していた。

元禄元年（1688）には河面（松屋）仁右衛門の尽力により、草津村のカキ養殖業者は、草津村を支配する三次藩から草津地先干潟海面の使用許可と大阪市場でのカキ船営業の免許を受けた。

草津村でカキ養殖に従事する者が増加し、これに人手がとられたため、草津村の中心的産業であったイワシ網漁は被害を被った。三次藩はイワシ網を保護するために、カキ養殖業者・カキ船業者に対し大阪へのカキの移出を一時的に禁止した。しかし、当時の三次藩は財政の立て直しの最中にあった。

前述の河面（松屋）仁右衛門とその弟（三次藩の医師）が三次藩に働きかけ、元禄2年（1689）にはカキ船を18隻に制限し、年間1貫目の運上銀を藩に納めることを条件に、大阪への輸送・販売の許可を得ることができた。このとき組織されたのが、草津村カキ株仲間³⁵⁾という同業者組合である。

ここで特筆すべきことは、草津村のカキ船が宝永5年（1708）に大阪町奉行からも、大阪での独占販売の特権を与えられたことである。そのいきさつは次のとおりである。宝永4年（1707）12月29日夜、大阪で大火事があった。道修町から出火し、船場や上町一帯が火の手に包まれた。そのとき高麗橋のたもとでカキ船を営業していた草津村の者が、高麗橋西詰の幕府の高札を船に積み天満橋方面に乗り回して火難から守った。その功績により、草津カキ船業者が大阪での営業活動を保証されることとなったのである³⁶⁾。この大阪での販売の権利は仲間株を最も有利なものにし、これが広島出身者によるカキ船営業独占のきっかけになったという³⁷⁾。

このように、大阪における販売活動の保証となるカキ仲間株は、地元広島での生産の特権と、大阪での販売の特権とを合わせた特殊な権利であった³⁸⁾。このカキ株制度ができてからはカキ船営業が活発に行われるようになった。

一方、仁保島村の養殖は前章で述べたように草津村と独立して発達した。大阪への販出も、すでに正

徳年間（1711～16）には仁保島でも行っていたと記録されている³⁹⁾。

ただし、仁保島ではまだ株仲間は形成されていない。仁保島のカキ仲間成立は、草津村よりもはるかに後年の寛保3年（1743）である。そこで、草津カキ仲間株を古株、仁保島カキ仲間株を新株と称した。この新株の成立には相当こみいった事情があったことは注意すべきことで、以下のとおりである。

草津村は延宝6年（1678）から享保5年（1720）まで三次藩（支藩）の領域であった。仁保島村は本藩支配であった関係から、また草津村でカキが不足したときは仁保島のカキを買い入れてカキ船を営業していたこともあり、草津村は仁保島村に対して特権を強く主張できなかった。草津村は、仁保島村が草津カキ船の名目でカキ船営業を行っていたことを黙認していた⁴⁰⁾。

かくして、仁保島村は草津村の特権を背景にしなが、自分たちがまだカキ株制を形成していないのを利用しつつ、無制限に大阪へ販出した。寛保年間（1741～44）になると仁保島村カキ船は、初め3人乗り7隻が、4人乗り14隻となり、次第に草津村カキ仲間間の営業を脅かすようになった。遂には草津村から藩に仁保島のカキ船増加の差留めが要望された。

結局、寛保3年（1743）1隻（1株）につき3人乗りのカキ船を、草津村は21隻、仁保島村は14隻とし、両村とも株仲間制による共通の取り決めに従うことで落ち着いた。これら35株が大阪でのカキ販売を独占した。

株制がなくなる明治以前まで、カキの大阪への移出は、草津村カキ株仲間と仁保島カキ株仲間の独占事業であった。

近世の大阪は、市内を縦横に掘り結んだ多くの堀川と、いたるところに架けられた橋によって特色づけられる（図3）。堀川が陸路の往来を妨げることはなく、人や物資の運搬はこの川や堀割によるところが大きかった。橋梁の両詰は船着場や荷あげ場として好適で、カキ船へもそのような石段を降りて行っ

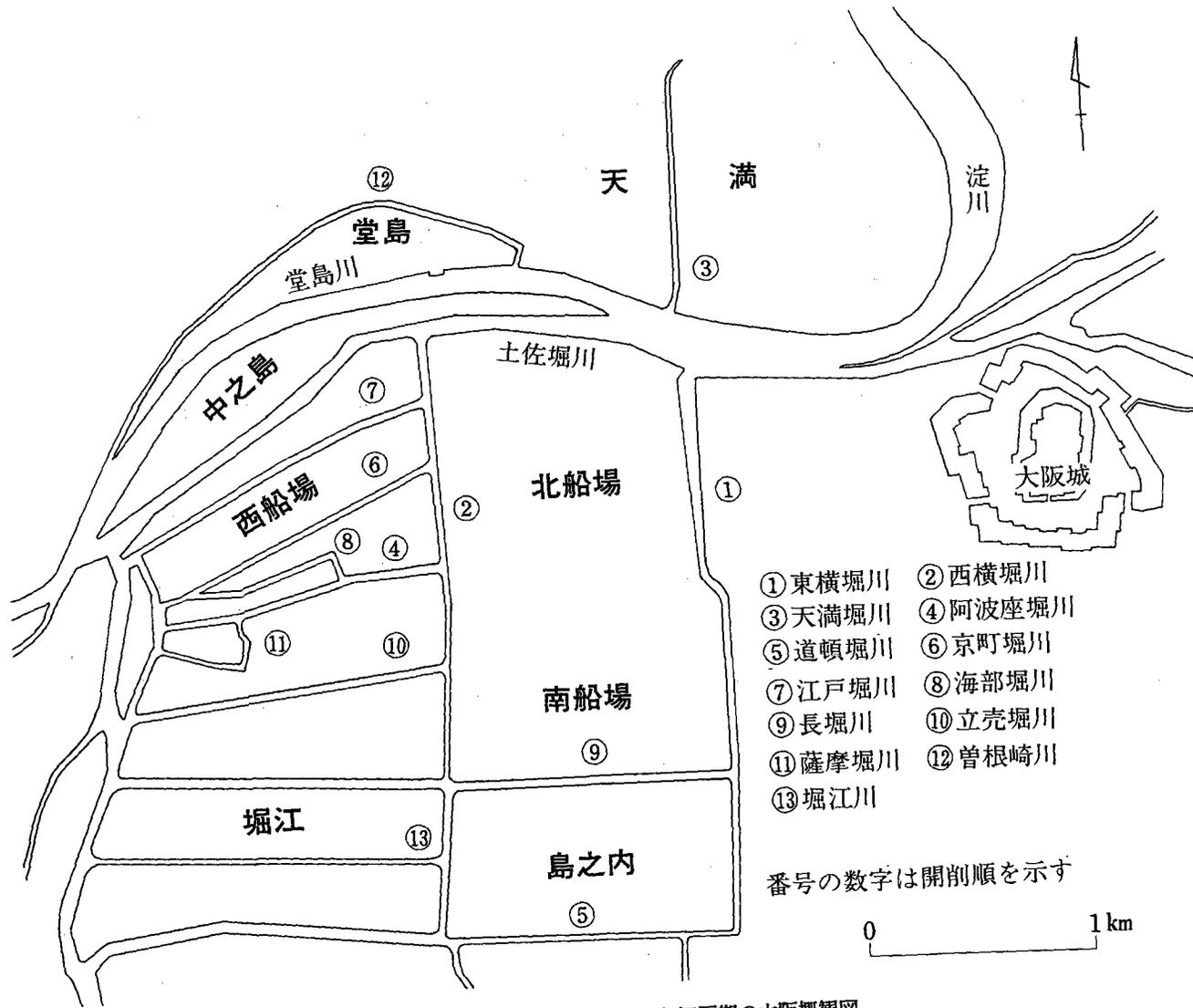


図3 主要水路を中心とした江戸期の大阪概観図

- 草津カキ船
- 仁保島カキ船



図4 寛保3年(1743) 広島カキ船の大阪営業場所

た⁴¹⁾。

カキ船の数、カキの販売数量およびその価格はカキ仲間法で定められていた。カキ船営業にとって船をどこの橋詰に置くかが最も重要な問題となり、形式的に自由であったが、業者の間では協定されており変更は許されなかった。そこで、草津村と仁保島のカキ仲間によって選ばれた35か所を地図⁴²⁾上にプロットした結果、以下のような分布の特性と立地要因が考えられる(図4)。

草津カキ船と仁保島カキ船は、大川(淀川)・曾根崎川・堂島川・土佐堀川・江戸堀川・京町堀川・立売堀川・長堀川・堀江川・道頓堀川・東横堀川・西横堀川・天満堀川の計13の堀川に分布している。これらの堀川は、船場・島之内・西船場・天満・堀江など大阪の中心部を取り囲むように流れ、同地域内における集客をねらったものと思われる。株仲間にも属さない無株者らは、大阪に近接する尼崎・堺・住吉などへカキ船を出した⁴³⁾。

大阪の中心で薬問屋など各種問屋街を形成する船場は碁盤目型に町割りがなされ、カキ船は、この船場を縦断・横断する道路に通じる橋を営業場所に設定したことが指摘できる。

前述のように船のつなぎ場所は業者間で協定されていて変更は許されなかった。また、一橋詰につき1隻と決まっているため、いくつかの堀川を除き、どの堀川にも比較的分散して据え付けられていた。

カキ船の分布が見られないのは、阿波座堀川・海部堀川・薩摩堀川の三つである。ここには蔵米をはじめ阿波の藍や薩摩の砂糖を荷受けする問屋が集積していた⁴⁴⁾。阿波座堀川から分かれた薩摩堀川の第一橋に鳴門橋という名がつけられていることから、阿波藩と薩摩藩のつながりがうかがい知れる。また西長堀川(長堀川の四つ橋以西をいう)にもカキ船の分布が見られない。鯉座橋^{かつお}という名の橋が架けられ、土佐藩蔵屋敷が二つも置かれていることから、同藩から積み出された産物の荷受け⁴⁵⁾が多かったと考えられる。

以上のことから察するに、広島カキ船が大阪のどの堀川においても立地を認められていたとはいうものの、上記の堀川での立地は制限されていたのではないだろうか。

しかしながら、上で指摘した三つの堀割で囲まれた地域は^{うづぼ}靱とよばれ、靱海産物市場が開設されていた。市場周辺には、塩干魚・昆布・鯉節・干鰯^{ほしお}などを取り扱う問屋が集積していた。とりわけ新靱町・新天満町・海部堀川町のいわゆる三町問屋はその代表例で、近郊農村の主要な肥料となった干鰯などの魚肥が集められ、全国最大の干鰯肥料市場であった⁴⁶⁾。広島カキ船がこの靱地域に注目しないわけはないと、筆者は推察する。地図におとしてみると、靱地域とカキ船立地地点とは、道筋で結ばれることが看取できることから、カキ船営業者は直進すれば靱地域へ通じることが可能になる橋詰を選んでカキ船を立地させたとと思われる。

草津カキ船の販売場所は、大阪のカキ問屋(銀主)の位置とほぼ一致している。このことから、カキ船を営業するカキ屋とカキ問屋とのつながりが深かったと判断できる(表1)。カキ問屋の多くは、カキ仲間に資金を前貸した。羽原又吉によれば、カキの養殖およびその大阪積み出しには相当の資金が必要であり、多くのカキ屋は、大阪の船宿やカキ問屋などから仕入銀として資金を前借し、その返済には販売代銀をあてる方法をとっていた⁴⁷⁾。大阪の特定問屋とカキ仲間との関係はながく続けられ、カキ仲間は先ずその問屋に積み出したカキを卸すとともに、カキ船そのものを大阪諸川の橋際につないでいた⁴⁸⁾。

カキ問屋以外の一般商業資本として、米穀商や呉服商らの中に剰余金を融資した者もある。その例として、大阪衣服商の阿波屋庄兵衛、仁保島本浦の古手物商人の半兵衛や丹綿商人の五兵衛の名前が記録されている⁴⁹⁾。

大阪は、同業者町・神社仏閣・芝居小屋・遊所・名所旧跡など町人の町にふさわしい都市景観を備えており、これらの配置もカキ船の立地要因と言えよ

表1 大阪カキ問屋（銀主）一覧表

年次	地名	問屋名
享和3年(1803)		京屋忠八
文化元年(1804)	本町浪花橋 (内野町) 船宿主 平野橋	阿賀屋善右衛門
		米屋吉兵衛(吉右衛門)
		岡野屋伴五郎
		辰巳屋仁右衛門
		米屋吉右衛門
		京屋忠兵衛
		辰巳屋
		なだや
		秋田屋
		山家屋
	久宝寺橋	両替屋
		大津屋
文化10年(1813)	長堀	灘屋太郎兵衛
		山口屋半兵衛
文化13年(1816)	阿波町	木屋長兵衛
文政12年(1829)	道修町	播磨屋嘉兵衛
		加嶋屋伊助
		高橋某
天保3年(1832)	西横堀筋違橋	
天保14年(1843)	常安橋	秋田屋宗右衛門
弘化元年(1844)	常安橋	秋田屋宗右衛門
嘉永7年(1854)	樽屋橋	

羽原又吉(1954):旧幕時代における芸湾養蠶業の発展過程,
『日本漁業経済史』により作成

う。以下にその事例をあげる。

西横堀川の新町橋、曾根崎川の桜橋・緑橋は、新町をはじめ曾根崎新地、堂島新地などの遊所地へ通じる橋である。同様に、古くからの遊び場として栄えてきた道頓堀川沿いには芝居小屋が並び、大衆芸能が盛んであった。この町に娯楽を求めて集まる客を見込んで、道頓堀川の相合橋や太左衛門橋にカキ船が立地したと思われる。

高麗橋は、上町と下町の境界をなし、西詰は人の往来が多く高札場があり、東詰は大阪から諸国への距離を定める起点になっていた。草津カキ船発祥の地でもあり、東西両橋詰で営業を行っていた。

日本橋にも同様に人通りが多く高札場が置かれていた。とりわけ堺・紀州街道へ直結する重要性をもち、このため日本橋筋は、旅籠が並ぶ宿場町であった。また船旅の拠点でもあり、京への三十石船や琴

平詣りの金毘羅船が北詰から発着し、船宿もあった。さらに近世末、南詰で鮮魚の市が開かれ、買い物客で賑わった⁵⁰⁾。

以上、カキ船の分布の特性からその立地要因をいくつかあげた。いずれにせよカキ船が大阪の商人たちに接待や商談の場や、船上で川遊びを楽しみながら食事をする場を提供したであろうと想像できる。

聞き取りによれば、人気の高い料理は土手鍋⁵¹⁾・酢ガキ・カキ飯などで、名産の広島菜のつけものが添えられ、これが好評だったという。

IV. 大阪におけるカキ船の展開

前章で述べたように、大阪の堀川におけるカキ船の営業場所は、業者間で協定されている。しかし実際のところ大阪で販売活動をするのに、仁保島カキ船は草津カキ船ほど有利な場所を与えられなかった

表2 草津カキ船営業場所の変遷

	寛保3年(1743)		明治42年(1909)		大正5年(1916)		昭和3年(1928)	
大川(淀川)	難波橋	南	難波橋	南	難波橋	南	難波橋	南
曾根崎川	桜橋	北	桜橋	北	天満橋			
堂島川					北区老松町	北		
土佐堀川	常安橋	南	常安橋	南	常安橋	南	常安橋	南
江戸堀川	淀屋橋	南	淀屋橋	南	淀屋橋	南	淀屋橋	南
京町堀川	大斎橋	北						
立売堀川	穴喰屋橋	南	穴喰屋橋	南	穴喰屋橋	南	穴喰屋橋	南
長堀川	心斎橋	北	心斎橋	北	心斎橋	北		
堀川			高台橋	北	高台橋	北		
道頓堀川	太左衛門橋	北					太左衛門橋	南
	相合橋	北	相合橋	南	相合橋	南	相合橋	南
			九郎右衛門町南		九郎右衛門町南	南	九郎右衛門町南	南
					大黒橋	南		
梅田入堀川							日本橋	北
東横堀川	思案橋	西						
	農人橋	西						
	久宝寺橋	西	久宝寺橋	西	久宝寺橋	西		
	平野橋	西						
	平野橋	東						
	高麗橋	西	高麗橋	西	高麗橋	西		
	高麗橋	東	高麗橋	東			高麗橋	東
			本町橋	東	本町橋	東		
西横堀川	京町橋				京町橋	東	京町橋	東
	筋違橋	西						
	信濃橋	西						
	新町橋	西	新町橋	西	新町橋	西	新町橋	西
天満堀川	樽屋橋	西						
百間堀川								
計	21か所		14か所		16か所		11か所	

と推測される。仁保島は新株であり、後から株仲間
に参入したからという理由がまず考えられる。また
カキ船数も草津村より少なく、そのうえ大阪への船
出を草津村より3日遅らせるという決まりまであっ
た。

このように、仁保島カキ船は草津カキ船に比べて、
株数すなわち販売上での特権が少ないことは明白で
ある。草津村の優位に対する仁保島の反発が当然あっ
たと思われる。株制が成立したころは、持株者と無
株者の対立であったのが、次第に草津古株と仁保島
新株との対立の様相を呈し、両者は大阪で異なった
営業活動を展開した。

草津カキ船の営業場所は、近世から近代にいたま
るで大きな変化は見られない(表2)。つまり草津古

株は、計画生産と販売統制により株仲間の共同性を
強く維持し、競争防止と利益保護をめざす、いわば
「相互規制型」であると言える。

ここで考察を要することは、カキ仲間制が明治4
年(1871)から5年(1875)にかけて消滅したにもか
かわらず、草津カキ船の大阪での営業場所が引き継
がれている点である。羽原又吉の論によれば、一旦
カキ株制度は崩壊したものの、明治10年(1877)前後
にはまた取り入れられ後代にまで存続し、今日の漁
業組合団体の実質的前身をなしているという⁵²⁾。実際
のところ、草津村から新たに大阪行きのカキ船1隻
を増加するごとに、従来の草津村カキ株仲間へ仲間
入料として180円を出すことになっていた。このこと
から見ても、古い制度が明治以降も根強く残されて

表3 仁保島カキ般営業場所の変遷

	寛保3年(1743)	明治2年(1869)	明治14年(1881)	明治26年(1893)	大正6年(1917)
大川(淀川)			天神橋 北	天神橋 北	天神橋 北
曾根崎川	緑橋 北				
堂島川	大江橋 北		大江橋 北	大江橋 北	大江橋 北
土佐堀川	栴壇木橋 南				
江戸堀川					
京町堀川	難波橋 南				
立売堀川		大国橋 北	大国橋 北	大国橋 北	
長堀川	中橋 北	中橋 北	中橋 北	中橋 北	
	板屋橋 南	板屋橋 南	板屋橋 南	板屋橋 南	
堀江川	高台橋 北				
道頓堀川	日本橋 南				
			長堀橋 南	長堀橋 南	長堀橋 南
			賑江橋 北	賑江橋 北	賑江橋 北
梅田入堀川		商会橋 北	商会橋 北	商会橋 北	
東横堀川	備後浜	備後浜	備後浜	備後浜	
	瓦屋橋 西	瓦屋橋 西	瓦屋橋 西	瓦屋橋 西	
	道修町浜				
			本町橋 西	本町橋 西	本町橋 西
西横堀川	西国橋 東	西国橋 東	西国橋 東	西国橋 東	
	御池橋 西	御池橋 西			
天満堀川	大平橋 東				
百間堀川			靱上ノ橋 北	靱上ノ橋 北	靱上ノ橋 北
			雑喉場橋 西	雑喉場橋 西	雑喉場橋 西
計	14か所	8か所(休商6)	14か所	14か所	7か所(向洋)

川上雅之(1976)『広島太田川デルタの漁業史』により作成

いたことが実証される⁵³⁾。

一方、仁保島カキ船の場合は、江戸期とは違った新規営業場所に移っている(表3)。つまり仁保島新株は、株の上での特権が少ない反面、生産・販売とも規制が緩やかで新たな販路を求めた、いわば「自由開拓型」と言えよう。その典型的な事例を次にあげる。

阿波座堀川の松栄橋南詰で、仁保島丹那の中屋伊兵衛が小屋をつくり、紀州和歌浦産カキ⁵⁴⁾と偽って営業した。阿波座堀川では、新株・古株とも営業を行っていないことは、前章に述べた通りで、その盲点と

なった場所を狙ったようである。

羽原又吉によれば、以下のような構図になっていた。文化13年(1816)、中屋伊兵衛がひび場の免許を得て養殖したカキを、和歌浦の太郎右衛門と結託して一旦紀州に送った。紀州藩へはこの人を顧主として金2両を払い、大阪阿波町の木屋長兵衛(紀ノ国屋ともいい紀州出身)宛へ出荷し、名産紀州牡蠣の商標で販売した、というものであった⁵⁵⁾。

このような密売の取り締まりや防止對抗策については、専ら草津村カキ株仲間の古文書があるのみで、仁保島側には見あたらない⁵⁶⁾。このように仁保島では

統制が緩やかであったため、仁保島の者が各地で密売を始める契機となったようである。

草津村では、仲間以外の者にカキ養殖を許可した事例がなく、本来のカキ株21人の共同性が強く継承されていた。しかし仁保島では、上の事例のように仲間以外の養殖を禁止してはいなかったようである。明和4年(1767)の丹那村では村をあげて養殖を始めた、という記録さえある⁵⁷⁾。

このように、仁保島では生産量が増大したために、大阪という活動領域枠から外れて、未開拓の地域にも販出しなければならなかった。その方策の一つと思われる史料がある。文化10年(1813)仁保島の湊崎・本浦における養殖業者21人のうち、自家カキ船営業をしているのはわずか5人であった⁵⁸⁾。つまり残り16人は大阪商人と連係を持ち、養殖した殻付きカキをあわせ集めて出荷したと思われる。すなわち湊崎・本浦では生産を主に、向洋は販売面へと、仁保島内において徐々に地域的分業化を進めていたのではないかと考えられる。大阪でのカキ船営業は、もともと湊崎・本浦・向洋の者が一緒に始めたのが、大正期には向洋の業者のみで占められていることから察せられる。

一方、草津村の活場使用者に記された名は、カキ船営業者であった⁵⁹⁾。すなわち、草津村の場合は生産者であると同時に、大阪での販売活動も行う商人でもあった⁶⁰⁾。

文政13年(1830)、仁保島本浦の中古屋林蔵が京都にカキを直送してカキ店を開いた。大阪商人岡田屋嘉兵衛と広島紙屋町の錫屋久兵衛が、京都の武田敬庵とともに京都直送と御所への上納を計画したのを、いち早く実行したものである⁶¹⁾。

カキ仲間では、すべての販売網を大阪に集中して統制し、京都などへ直送しないという協定があったので、草津村側は、上述したような仁保島側の計画を阻止し、京都市場をも草津村が独占しようとした⁶²⁾。

従来は殻付きカキを京都に送っていたが、草津村

は大阪で剥き身にしたものをカゴに入れて送ることに改定させた。これでは京都に着くまでに腐敗しやすく、しかも1株につきカゴ1盃と数量が限られているので需要を充たすことができなかった⁶³⁾。

羽原又吉はこの一件について、草津村カキ株仲間の京都市場独占に対抗し、仁保島が大阪の岡田屋嘉兵衛ら一派と通じて京都への密売を開始したと見ている⁶⁴⁾。

嘉永3年(1850)伏見商人茨木屋武兵衛が、カキ仲間の大阪市場には支障がないことを条件に、新規営業許可願を広島藩に出した。大阪と伏見の間に中継卸問屋を設け、これを中心に京都・伏見・郡山・大津・草津・八幡・膳所・彦根などに特約店を置き、ここを通してその地方の小売店へとカキを送ることを計画した⁶⁵⁾。これに対してカキ仲間は、京都・伏見はカキ仲間の商業圏であり値崩れを理由に反対した⁶⁶⁾。結局、武兵衛の申請は許可されなかったが、当時の株仲間のおかれた状況がうかがい知れる。

カキ船の繁栄に刺激されてこれを真似る者が現われ、次第に株仲間の営業独占権が弱められていった。また広島湾内の草津村・仁保島以外のカキ養殖地域からもカキ船の営業が起り、瀬戸内に広く発展して行われることとなった⁶⁷⁾。

V. カキ船の機能変化に伴う立地変容

本章は主として聞き取り調査を基にして記述するものである。

筆者はカキ船営業が行われた時代を江戸期・明治期・大正期・昭和初期・戦後の5期に時代区分を行った。そして各時代におけるカキの主な輸送手段を明記した上で、カキ船の輸送機能と販売機能が変化するに伴い、カキ船の立地にどのような変容が見られたか、その経過を表4にまとめた。

カキ船というものは、広島から大阪へ冬季だけの出稼ぎによる生カキ販売を行っていたものであった。したがって、カキ船にはカキを広島から大阪まで海上輸送するという機能と、大阪でカキを販売する機

表4 カキ般のもつ機能変化よりみた立地の変容

時代区分	江戸期 (草創期)	明治期 (台頭期)	大正期 (最盛期)	昭和初期 (衰退期)	戦後 (消滅期)
輸送手段	帆船	帆船	汽船	貨車	トラック
輸送機能	殻付きカキの輸送	殻付きカキの輸送	×	×	×
販売機能	生カキ販売とカキ船料理店	カキ船料理店	水上料理店 (カキ料理)	水上料理店 (冬：カキ 夏：川魚)	一般の料理店
立地変容	カキ船と人の季節的移動	カキ船と人の季節的移動	カキ船の定着	カキ船と人の定着	カキ船が陸上がる

注) ×印は、殻付きカキを海上運搬するというカキ船の輸送機能が不要になったことを表す。

能という二つの機能があった。しかし、汽船や貨車など新しい運送手段の出現や社会環境の変化に伴い、カキ船のもつ機能に変化が表れた。また、もともと季節移動するものであったカキ船が、大阪の河川の橋詰に年中定着するようになったり、さらには陸に上がるようになるなど、カキ船の機能変化に対応してカキ船の立地にも変化が見られた。その変化の経過は以下に述べるとおりである。

カキ船の草創期といえる江戸期において、カキ船は秋の終わりごろ草津村や仁保島・矢野村などから殻付きカキを積んで出港し、大阪や内海沿岸の諸港で生カキを販売したり、船上でカキ料理を提供するなどして、翌年の1～2月には広島に帰港していた。つまり、この期のカキ船営業には冬季だけの出稼ぎという傾向があり、カキ船そのものとカキ船業者の両方とも広島と営業地との間を季節移動していた。

明治以降、株制度が崩壊し自由に営業ができるようになると、それまでの生カキ販売よりも、カキ船の上での料理業が主体となり、販売機能に変化が表れ始めた。カキ船の台頭期と言えよう。本来は輸送用であるカキ船を料理営業にも使うため、殻付きカキと一緒に屋形や畳・ふすま・炊事道具などを積み込んだカキ船が瀬戸内海を航行するようになった。カキ船の立地には変わりなく、草創期と同様、カキ

船と業者は季節的移動をした。

明治末期から大正期になると、カキの輸送は帆船のカキ船から汽船にとって代わられた。大阪汽船や尼崎汽船で宇品港から毎日発送された。すなわち、殻付きカキを海上運搬するというカキ船の輸送機能は不要なものとなり、販売機能だけが残った。当然、カキ船の立地にも顕著な変化があった。カキ船は営業地に一年中定着し、冬にはカキ料理を提供販売する水上料理店になった。これに応じて、カキ船は組立て式に改良された。冬の営業が終わると、障子やすべての器材は、折りたたんで船の中に固定された。嵩が低くなったカキ船は橋の下に入れられた。業者の方は広島に帰省し、晩秋には来阪して再びカキ船を組み立てて営業を行うという方式をとるようになった。図1でもわかるように大正10年代には、第一次世界大戦(1914～18)後の好況という社会情勢に支えられてカキ船最盛期を迎えた。

昭和の初めになると、業者もその営業地に定住するようになった。カキの輸送手段に貨車が使われ、それまでのような殻付きカキではなく、むき身にしたカキが迅速かつ確実に大阪の目的地のカキ船まで届けられるようになったからである。聞き取りによれば、夕方に広島を出ると翌早朝には和歌山に到着したという。このように業者は、冬にはカキだけを

広島から貨車で取り寄せ、夏はカキの代わりにウナギなどの川魚を出して、年中カキ船を経営するようになった。カキの輸送手段が貨車中心となり、カキ船のみならず業者も定着し、営業形態をも変化させていったのである。

道頓堀川には、船底にも部屋を設けた二階建ての動かないカキ船が現われたり⁶⁹⁾、カキ船の屋形部分を陸上のカキ料理屋として利用した業者もあった⁶⁹⁾。しかし一年中船をつないでいると、季節感や珍しさがなくなり、次第にすたれていく船も多かったという。カキ船の衰退期である。

この後のわが国は太平洋戦争への道を歩み出しており、昭和17年(1942)には戦時物資統制令がしかれた。カキ船の大半が廃業となり、その数は激減の一途をたどった。戦後、トラック輸送の発達に伴い船便の必要がなくなった。川舟の需要が衰退し、川の使命が消えるとともに、各河川が汚染されてきたため、大阪のほとんどの河川が埋め立てられた。立ち退きを余儀なくされたカキ船は、陸に上がり一般の料理店に変わってしまい、次第に姿を消していった。

VI. おわりに

カキの輸送方法が、帆船や汽船の海上輸送から貨車やトラックの陸上輸送に変わり、また川の埋め立てや改修のため、陸に上らなければならなかったカキ船は、料理店などに業態を変化させて、各地で今なお活躍している。その事例として吉兆(大阪・高麗橋)、かき峰(大阪・池田)、かき十(神戸)、かき惣(和歌山)、旅館くらしき(倉敷)、半兵衛庭園(広島市南区本浦)などがあげられる。

また、広島湾内の干潟の大部分が埋め立てられ、どうしても沖合へ出なければならず、現在の筏式垂下法へと改良させてきた養殖生産者の努力も明記しておきたい。

カキ船全盛期の大正末期ごろ、竹ひびを干潟に立てて養殖した三年カキと同じくらい良質のものを、もっと早くふとらせ増産することが県の産業振興の

大きな課題であった。竹ひびの厚さや高さを変えるなどいろいろな方法がとられたが良い結果は得られなかった。しかし、「軍艦には大きなカキがつく。そのままだとスピードは落ちるし燃料はかさむし、削り落として塗り替えるが、一年もするとまた大きなカキをつける。停泊中より航海中の方が、そして水面すれすれの所でより大きなカキがつく。」という呉の海軍工廠でカキ退治の船底塗料の研究をしている一青年の話がヒントとなり、「竹ひびを筏に組んで船で引き回したり、潮流の速い所に浮かべて置く。」という筏式に改良されたということは興味深い。

カキの生産・流通・消費を通した、広島・大阪という二つの地域における近代以降から現在に至るまでの変容については今後の課題としたい。

(広島大・研)

【付記】

本稿をまとめるにあたり、関西大学柿本典昭先生、広島大学北川建次先生の御指導をいただいた。要旨については第38回(平成7年度)歴史地理学会大会(於:駒澤大学)において発表を行った。

【注】

- 1) 植条則夫(1992):『魚たちの風土記』毎日新聞社、316~321頁。
- 2) 草津・小川家文書(1735):『佐伯郡草津村牡蠣株由来書』
- 3) 中国新聞社(1982):『広島県大百科事典』238頁。
- 4) 広島県漁業協同組合連合会(1994):『広島かき』4頁。
- 5) 広島県農政部水産漁港課(1994):『広島かき生産出荷指針』11頁。
- 6) 新見吉治(1907):草津村蠣仲間(1)~(5)『尚古』芸備史壇、第4~8号、5~9頁、9~13頁、19~25頁、21~26頁、27~32頁。
- 7) 羽原又吉(1954):旧幕時代における芸湾養蠣業の発展過程、明治維新前後における芸湾養蠣機構の推移、『日本漁業経済史』、岩波書店、3~155頁。

- 8) 草津・小川家文書 (1819) : 文政 2 年佐伯郡草津村国郡志御用下しらべ書出帖, 『新修広島市史』資料編その 1。
- 9) 大島襄二(1972) : 『水産養殖業の地理学的研究』東大出版会, 2~19頁。
- 10) 川上雅之(1976 a) : 『広島太田川デルタの漁業史』第 1 輯, たくみ出版, 110~139頁。同 (1976 b) : 『広島太田川デルタの漁業史』第 2 輯, エイト出版, 70~71頁。
- 11) 土井作治(1978) : 広島牡蠣仲間と大阪市場, 『西南地域史研究』第 2 輯, 文献出版, 140~160頁。
- 12) 『藝藩通志』巻35, 安芸国安芸郡各村図上。
- 13) 前掲 8)。
- 14) 広島県 (1981) : 『広島県史』近世 1, 637~647 頁。同 (1984) : 『広島県史』近世 2, 296~302 頁。
- 15) 広島市役所 (1959) : 『新修広島市史 第 3 巻』167~183頁。同 (1958) : 『新修広島市史 第 4 巻』, 328頁。
- 16) 『佐伯郡誌』(1972) 名著出版, 511頁。
- 17) 『仁保村志』(1929) 93~99頁。
- 18) 大阪府 (1985) : 『大阪府史 第 5 巻』近世編 I, 334~352頁, 469~481頁, 556~561頁。同 (1985) : 『大阪府史 第 6 巻』近世編 II, 323~328 頁, 634~637頁。
- 19) 大阪市 (1958) : 『新修大阪市史』第 3 巻, 423~429頁, 472~481頁。
- 20) 広島かき出荷振興協議会 (1977) : 『広島かき』49頁。
- 21) 谷口澄夫・後藤藤一・石田 寛 (1978) : 『瀬戸内の風土と歴史』山川出版社, 142頁。安芸の地乗りと呼ばれ, 音戸瀬戸から三原を経て尾道・下津井といった沿岸を航行するコース。
- 22) 渡辺則文・北川建次監修 (1986) : 『広島県風土記』旺文社, 29頁。鞆の港は古来, 潮待ち港として発展をみた所で, ここには必ず停泊したという。
- 23) 広島市郷土資料館 (1986) : 『カキ養殖』10~12 頁。
- 24) 前掲20), 37頁。ノリ, カキなどを養殖するため, 海中に建てておく竹, 樹枝の類。海中などに枝のついた竹などを並べておいて, 一方に口をあけ, 中に入った魚が出られないようにしておいたもの。
- 25) 木村兼葎堂(1799) : 日本山海名産図会, 浅見 恵・安田 健・訳編『近世歴史資料集成』, 第 II 期 第 1 巻, 日本産業史資料(1)総論, 科学書院(1992) 190~193頁。八重ひび養殖法の絵図がある。
- 26) 前掲23), 31~34頁。
- 27) 元は海島であったため仁保島と称した。後世, 新開により陸地と接し, 安芸郡仁保島村といわれ, 安芸の国の中でもいちばん広い面積をもつ村として知られていた。堀越・向洋・洲崎・本浦・大河・丹那・日宇郡の 7 浦と似島・金輪島・峠島・弁天島・宇品島を編入していた。
- 28) 前掲17), 96頁, 98頁。
- 29) 暁鐘成 (1860) : 摂津名所図会大成, 『浪速叢書』, 13巻下, 33頁。
- 30) 前掲10), 70頁。
- 31) 前掲10), 71頁。
- 32) 広島市水産振興協会での聞き取りによれば, マガキは低塩分濃度を好み, 3.2%が理想的である。
- 33) 大阪水産者流通史研究会 (1971) : 『大阪水産物流通史』三一書房, 67頁。
- 34) 広島郷土史研究会(1979) : 『広島軍津浦輪物語』408~409頁。
- 35) 前掲 6)。
- 36) 草津・小川家文書 (1735) : 『西・河面両家事跡書』「宝永 4 年大坂大火之節功勞ありたる事」。
- 37) 前掲 7), 38頁。
- 38) 前掲33)。
- 39) 前掲 6), 24頁。「宝永年間安芸郡仁保島蠣屋共も同様於彼地蠣商事仕」とある。
- 40) 前掲15), 180頁。
- 41) 三浦行雄 (1979) : 大阪の川と橋, 『大阪春秋』第19号, 85頁。
- 42) 大阪都市協会 (1989) : 「浪花の繁栄」(『まちに住まう—大阪都市住宅史』付図, 平凡社)。
- 43) 前掲33), 70頁。
- 44) 藤本 篤 (1969) : 『大阪府の歴史』山川出版社, 169頁。
- 45) 前掲44), 169頁。
- 46) 前掲44), 174頁。
- 47) 前掲 7), 59~60頁。
- 48) 前掲15), 178頁。
- 49) 前掲 7), 99頁。
- 50) 松村 博 (1975) : 『大阪の橋』松籟社, 98頁。
- 51) 荒川好満・山崎妙子 (1977) : 『牡蠣—その知識と調理の実際—』柴田書店, 2~31頁。土手鍋はだしの中にみその固まりを入れ, これが川の土手のような形だからという説がある。これは大阪の

- 味覚の一つとってよい。
- 52) 前掲7), 122~151頁。「草津案内」(1924)には井口屋・三島屋・吉文・西松・小西の代表的魚問屋が記録されている。このうち西松と小西はカキ仲間から引き継がれたと推測できる。
- 53) 前掲7), 152頁。
- 54) 浅野氏が転封の際、産業振興のために和歌の浦から移植したのが広島湾におけるカキ養殖の起源であるという説がある。
- 55) 前掲7), 82~83頁。
- 56) 前掲10), 128頁。
- 57) 前掲10), 128~130頁。
- 58) 前掲10), 157頁。
- 59) 前掲10), 67~69頁。
- 60) 前掲7), 35頁。
- 61) 前掲7), 88頁。
- 62) 前掲34), 420頁。
- 63) 前掲34), 420頁。
- 64) 前掲7), 94~95頁。
- 65) 前掲7), 110頁。
- 66) 前掲34), 420頁。
- 67) 文化12年(1815)の「国郡志下調書」(『水産提要』所収、広島県勸業課)によると、堺、尼崎、兵庫、高砂、赤穂、明石、洲本、高松、丸亀、松山、西条、今治、大洲、三津浜、玉島、福山、松永、三田尻、下関、小倉の諸国にまで販路をのばしている。
- 68) 三浦行雄(1993): 牡蠣舟, 『大阪春秋』112~115頁。
- 69) 前掲60)。